様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４３１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０４３８１

研究課題名（和文）コミュニティ形成による高齢期のライフデザインの発達支援の検討

研究課題名（英文）The Study of Life Designing in Later Life through Community Building

研究代表者
日下　菜穂子（Kusaka, Nahoko）

同志社女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：７０３０９３８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではライフ・キャリアの発達を人の生涯を通じた学習ととらえ、状況的学習論を視座に学習するコミュニティの中での高齢期のライフ・キャリア発達がすすむとして、協同して学ぶ場の構築を通して高齢期の心理社会的発達プロセスを明らかにすることを目的に研究を行った。期間内に、高齢者と大学生、小学生が多世代で協同する学習環境を構築した。そして、そのコミュニティの形成過程の検証とともに、参加前後の質問紙調査を実施し、ライフ・キャリア発達におけるコミュニティ参加の効果を確認した。研究成果はResearchmapおよびプロジェクトのホームページから公表するとともに、論文やシンポジウムにて公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多世代の分断が深刻化する現在、目的を共有して多様な人がつながる環境をいかに構築するかを明らかにする本研究の成果は、国内外での社会的孤立の問題への解決を示す一助になるといえる。期間中のコロナ禍により、人が集まる活動が一層難しくなったことを受け、本研究ではシニアのICT活用を強く推進し、期間終了時には高齢者と若い世代がICTを使ってコミュニケーションを深めることを可能とした。研究から抽出したノウハウは、シニアのICT活用ガイドブックやコミュニティ形成のヒントブックとして公開しており、2000以上のダウンロードがある他、学会誌やシンポジウム等で成果公表することを通して学術・社会的な意義を高めた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to build a community where people from multi-generations can collaborate to learn and also to clarify the process of psychosocial development in old age. Senior citizens, college students, and elementary school students shared a common purpose of learning and built a collaborative learning environment in this community. While verifying the changes in multi-generational relationships through observation, we conducted a questionnaire survey of the participants before and after participation. The results showed the effectiveness of community participation on their lives and in their career development. The results were published in academic journals and presented in symposiums.

研究分野：高齢者心理学

キーワード：コミュニティ実践　ライフキャリア発達　多世代交流　学習環境デザイン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

多くの人が長い人生を享受できるようになった現在，老いの変化を自然なこととして，あるがままに受け入れる大切さが見直され始めている。人生後半の理想的なあり方を表現する言葉として「健康長寿」が代表的であるが、老いによる変化が必ずしも「健康長寿」ではないのが現状であり、人々の老いの不安を高める原因となっている。心身の「健康」を維持し，生涯現役は理想とはいえ，いつまでも元気で見た目も変わらずにいるのは難しい。その現実を前に，加齢への画一的な価値が浸透する社会からのアンチエイジングを推奨するプレッシャーが，長く生きることへの不安を高めている。老いや病といった答えが出にくい事態に直面し，多くの人が不安を抱えて無力感に陥る高齢社会の現状は，Bandura A.がその著書 ”Self-efficacy in Changing Societies”（バンデューラ, 2009)の中で指摘する，社会の激動により集団の効力感の発達が妨げられていく状況と重ねることができる。

これまでに多くの研究により，学業成績や生産性等の社会的価値を追求する効力感と，個人の well-being との関連が明らかにされてきた。しかし，複雑化し多様化する社会の様々な問題に対するときに，画一的な社会的価値をゴールとして目の前の利益のためだけに動くのでは，持続的な問題解決につながらないことが明らかになりつつある。

これからの時代には，個人の利益を超えた大きな目的を見い出し，人々がその目的を共有し，社会全体や次の世代のために自分たちに何ができるのかにコミットしていく，協同の重要性がますます高まるといえ老いや死という答えが出にくい問題に向き合う上で、対話を通して人生を統合し、周囲との関係性の中に意味を創り出していく、創造的思考をはたらかせる場の構築が求められる。

２．研究の目的

高齢期のさまざまな変化に対応し，長い生涯にわたり生きがいを追求して Quality of Life を維持・向上させ続ける，高齢者のライフ・キャリアデザインの発達支援を目的に，高齢者への支援プログラムの開発および，個別の生きがい追求を支える地域実践の場を構築する。

本研究は以下の３点を具体的目標とし，地域における高齢期の発達支援のモデルを検証する。

１）社会的文脈における高齢期のライフ・キャリア発達のプロセスの分析
２）社会関与のある高齢者，孤立高齢者への心理社会的支援の実践と効果検証
３）学習コミュニティ形成を通じた人生後半のライフ・キャリア発達の支援モデルの検討

上記を明らかにするために、本研究では多世代の共同体の生成過程に注目し、世代間の相互の関わりでライフ・キャリアにおける発達、成長が促される環境の条件を探求するとともに、実践からみえてきた制約条件と今後の課題について検討し、多世代の相互作用の中で人生全般に通じる学びが深まる環境の条件を探る手がかりを得る。

３．研究の方法

多様な人と協同し生き方を創造する学びの場として、多世代が共に学ぶ実践研究（ワンダフル・エイジング; Kusaka, et. al., 2019）を行なっている。このプロジェクトをプラットフォ

ームに、高齢者の自律的な姿勢を認知行動療法に基づくライフデザインのプログラムを検討する。さらに、そのプログラムを修了した人たちで定期的に集まる機会を設け、協同的に学ぶ活動を実施する。他者と共に人生の意味を見出す学習環境を形成した。

高齢期のライフ・キャリア発達に関しては，老年社会学における活動理論や離脱理論の検討，近年では老年的超越理論(Tornstam,2005)の提唱から理論的研究が行われてきた。これらはいずれもエイジングを喪失として扱い，特に離脱理論と老年的超越理論は高齢期の社会との関係性の喪失が，中年期までの関係性の獲得を含む発達とは質的に異なる発達段階の様相として区分される点で特徴的であった。しかし現在では高齢者の社会参加は活発化し，また身体機能が衰え心身の疾患に罹患した後でも，社会的なつながりがあることが QOL の維持に関連することが明らかにされる(Kanamori,et al.,2014)。また Baltes(1990) の選択的最適化とそれによる補償(SOC)の理論に示されるように，関係性の獲得を通じた発達と関係性の喪失の双方が高齢者のライフ・キャリア発達に寄与すると考えられる。

本研究では，ライフ・キャリアの発達を人の生涯を通じた学習ととらえ，状況的学習論を視座に学習するコミュニティの中での高齢期のライフ・キャリア発達が進むとし，協同して学ぶ場の構築を通して高齢期の心理社会的発達プロセスを検証することとした。

本研究の中で、大学生と高齢者が協同して小学生のプログラミング教育を支援するコミュニティの形成を行なった。そのプロジェクトに参加した高齢者と大学生のライフ・キャリアの発達を参加前後の質問紙とインタビューによって検証した。

1) 調査対象者・時期 プロジェクトに参加した高齢者 6 人と大学生 16 人，対称群としてプロジェクトに参加していない高齢者５人と，プロジェクトに参加していない大学生 13 人を対象に，自記式にて質問紙への回答を求めた。結果の分析は，開始時と終了後の 2 回の調査両方に回答した参加高齢者 5 人（男性 3 人，女性２人，平均年齢 74.6），参加女子大学生 14 人，非参加高齢者 5 人（男性 3 人，女性 2 人，平均年齢 71.6 歳），非参加女子大学生 13 人を対象に行った。

調査時期は，プロジェクトの開始時の 2019 年 4 月と，プロジェクト終了後の 12 月の 2 回であった。

2) 調査項目 協同学習のプロジェクトの参加を通じた効果が期待される，「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力，人間性等」に関連する変数として，知的好奇心，曖昧さへの態度，日常生活スキル，自尊感情をとりあげ，次の尺度を用いて質問紙調査を実施した。

好奇心（Curiosity）は，教育の領域において学習意欲を高める内発的動機づけとの関連が指摘されており（鹿毛, 2013），課題追及場面での教育的達成に影響することが確認されている（von Stumm, Hell, & Chamorro-Premuzic,2011）。そこで，知的好奇心尺度（西川・雨宮，2015）を用いて，知的好奇心の変化を把握することとした。この尺度は，拡散的好奇心 6 項目，特殊的好奇心 6 項目の 12 項目からなり，拡散的好奇心は，新奇な情報や知識を求めて方向性を定めず探索行動を行うことを動機づけるもので，特殊的好奇心は矛盾や情報の不整合に対して，方向性を定めて探索行動を行うことを動機づけるものとされる。

曖昧さへの態度（ambiguity tolerance）は創造的な学びとの関連が深いとされる（Brown, 2000）。答えの見えにくい状態を受け入れる資質の指標として，曖昧さへの態度尺度（西村，2007）を用いて評価した。曖昧さへの態度尺度の下位尺度には，「曖昧さへの享受」「曖昧さへの受容」「曖昧さへの統制」「曖昧さの排除」「曖昧さへの不安」の 5 つがあり，計 26 項目で構成されている。

ライフスキルを多面的に評価する多次元の尺度として，日常生活スキル（島本・石井 2006）を用いた。日常生活スキルは，「親和性」「リーダーシップ」「計画性」「感受性」「情報要約力」「自尊心」「前向きな思考」「対人マナー」の 8 つの下位尺度があり，計 24 項目で構成される。本稿では，「対人マナー」を除いた 21 項目を用いた。

学習者の自己肯定感情をあらわす概念の一つである自尊感情を測定するために，Rosenberg 自尊感情尺度（Rosenberg Self Esteem Scale; RSES-J, Mimura & Griffiths, 2007）を用いた。RSES -J は 10 項目で構成され，４件法を用いて回答を求めるものである。

４．研究成果

1) 大学生における参加前後の変化 プロジェクトへの参加前後の知的好奇心，曖昧さへの態度，日常生活スキル・自尊感情の大学生における変化を検討するため，時期（プロジェクト開始時・プロジェクト終了時）と参加の有無（参加群・統制群）を要因とする反復測定一般線形モデルによる分散分析を行った。その結果，日常生活スキルの「前向きな思考」（F=3.339，p<.080）の交互作用が認められた（Table 3)。2 群それぞれの参加前後の尺度得点の差を対応のある t 検定を用いて検証した結果，参加群の学生の自尊感情（t=-1.847，p<.088）において有意傾向が示され，参加後の得点が向上していた。一方，統制群の学生は感受性（t=5.196，p<.000)，前向きな態度（t=1.848，p<.089)，自尊感情（t=-1.885，p<.084）に有意傾向が認められ，参加前に比べて得点が低下していることが明らかとなった。

2) 高齢者における参加前後の変化 プロジェクトへの参加前後の知的好奇心，曖昧さへの態度，日常生活スキル・自尊感情の高齢者における変化を検討するため，時期（プロジェクト開始時・プロジェクト終了時）と参加の有無（参加群・統制群）を要因とする反復測定一般線形モデルによる分散分析および，対応のある t 検定を行った。なお，データに欠損があった場合は対象から除外して分析した。分散分析の結果は Table 4 に示すとおり，高齢者においては交互作用，時期・参加の有無の主効果で有意差が認められるものはなかった。対応のある t 検定で 2 群それぞれの参加前後の差を検証した結果，高齢者群に有意傾向が認められたものはなかった。

多世代で学ぶ意味を問うために，協調学習への参加による発達的変化をどのような指標を用いて客観的に把握するのかという課題に対し，プログラミング教育で変化が期待される変数を用いて質問紙調査を実施した。その結果，大学生においては，日常生活スキルの「前向きな思考」の参加の効果が確認された。さらに自尊感情については，統制群の大学生の得点が低下したのに対し，参加した大学生に参加後の改善が認められた。見えない未来を前向きに展望する「前向きな思考」は，自分一人で取り組む時には難しかったことでも，周囲と協力して目的を達成する体験を通して高められる。本稿のプロジェクトを通して，小学生に学ぶ楽しさを教えるという目的に近づく体験が，「前向きな思考」を高めたことが推測できる。また自尊感情の向上については，参加後のディスカッションから，大学生が役割を自ら選択してプロジェクトの達成に貢献したことが語られていた。自尊感情尺度の作成にあたり Rosenberg(1965)は，自分自身を価値ある人間として受け入れる自己受容を意味するものとして自尊感情を捉えた（櫻井,2000)。参加した大学生は，同世代や異世代との関係性の中

に自分自身の居場所を見出すことで自己を受け入れる自尊感情が高まったことが伺える。

一方の高齢者においては，質問紙調査で用いた変数では参加による効果を確認することができなかった。その理由として，高齢者の参加動機が，プログラミングのスキルの向上などの「自己成長（知識・技能）」や，「楽しさ」にあったことがあげられる。効果測定に用いた尺度は，大学生が参加動機に多くあげていた「自己成長（資質）」に関連する項目が多く含まれていたことから，高齢者における有意な効果が認められなかったと考えられる。この結果は，同じ活動に参加する人であっても，その活動への参加がどのような体験であったのかの意味を一律的な評価基準で把握するのは難しいことを示している。 特に多世代を対象とする本稿の活動では，参加動機や参加の仕方に，世代や個人特性による違いが大きい。今後の研究においては，個別の参加動機を把握した上で，世代別・個人特性別の参加目的に応じた評価法を柔軟に検討することが必要といえる。

Bandura, A. (Ed.). (2015). Self-efficacy in changing society. Cambridge University Press. （アルバート・バンデューラ（編）， 本明　寛，野口京子（監訳）(1997). 激動社会の中の自己効力. 東京：金子書房.

Brown, H.D. (2000). Styles and Strategies. In H. D. Brown(Ed.), Principles of language learning and teaching. (4th ed.). White Plains, NY.

Brown, A.L. & Campione, J. C. (1994). Guided discovery in a community of learners: In K. McGilley (Ed.), Classroom lessons: Integrating cognitive theory and classroom practice. MA: MIT Press, 229-270.

Kusaka N., Ueda N. & Kondo K. (2019). Multigenerational Collaboration to Create a Community of Practice through Robot Application Development. In W. Lepuschits, M. Merdan, G. Koppensteiner, R. Balogh & D Obdržálek (Ed.) *Robotics in Education*, Switzerland: Springer Nature, 125-136.

Roschelle, J. & Teasley, S. D. (1995). Construction of shared knowledge in collaborative problem solving. Computer Supported Collaborative Learning, 128, 69-97.

Martinez, S. L. & Gary S. (2013). Invent to Learn: Making, Tinkering and Engineering in the classroom. CA: Constructing Modern Knowledge Press.

Miura, C. & Griffiths, P. (2007), A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. Journal of Psychosomatic Research, 62, 589-594.

西川一二・雨宮俊彦. (2015). 知的好奇心尺度の作成：拡散的好奇心と特殊的好奇心. 教育心理学研究, 63, 412-425.

桜井茂男.（2000）.ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71

von Stumm, S., Hell, B., & Chamorro-Premuzic, T. (2011) . The hungry mind: Intellectual curiosity is the third pillar of academic performance. Perspectives on Psychological Science, 6, 574-588.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 日下菜穂子	４．巻 12(1)
２．論文標題 エイジングと認知行動療法：超高齢化社会の価値転換	５．発行年 2019年
３．雑誌名 認知療法研究	６．最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日下菜穂子	４．巻 1
２．論文標題 高齢者と大学生が共に学ぶ実践コミュニティの構築	５．発行年 2020年
３．雑誌名 関西学院大学心理科学実践	６．最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日下菜穂子・末宗佳倫・下村篤子・上田信行	４．巻 31(4)
２．論文標題 プログラミング教育を介した多世代が教え合う協調学習の生涯発達における可能性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 発達心理学研究	６．最初と最後の頁 201-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Nahoko Kusaka
２．発表標題 Autonomy and End-of-life Decision Making in Japanese Society
３．学会等名 International Association of Gerontology and Geriatrics European Region Congress 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nahoko Kusaka
２．発表標題 Autonomy and End-of-life Decision in Japanese Society
３．学会等名 The International Association of Gerontology and Geriatrics（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 日下菜穂子
２．発表標題 高齢者の価値の明確化と行動活性化の技法
３．学会等名 日本老年行動科学会第20回大会
４．発表年 2017年～2018年

１．発表者名 Nahoko Kusaka, Jin Narumoto, Noriaki Tsuchida, Atsuko Shimomura
２．発表標題 Finding the Meaning in Life Program for older adults: The pathway to Wonderful Aging
３．学会等名 The 21th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics（国際学会）
４．発表年 2017年～2018年

１．発表者名 日下菜穂子
２．発表標題 途切れない高齢者の社会参加を支えるICT活用：リモートで多世代コミュニケーションを活性化する
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

【ワンダフル・エイジングプロジェクトHP】
http://dwc-gensha.jp/HP_kusaka/ikigai/

【高齢者とオンラインの対話を楽しむヒントブック】
https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/download/480124/7d3326de18f9eef29d5bf3f95778cdf7/18043?col_no=2&frame_id=976141

【高齢者とオンラインの対話を”もっと”楽しむヒントブック】
https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/download/480124/482118e46db1c0392d50b61bafed5c73/22318?col_no=2&frame_id=976141

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	土田　宣明 (Uchida Noriaki) (40217328)	立命館大学・総合心理学部・教授 (34315)	
研究分担者	武藤　崇 (Muto Takashi) (50340477)	同志社大学・心理学部・教授 (34310)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関